

西阿知和町於新造古墳出土品がある。⁽¹⁾ 本古墳は標高五〇メートルほどの丘陵上に造られた全長四二メートルほどの帆立貝式前方後円墳である。出土した埴輪の復元径は、五十狭城入彦皇子墓出土品とほぼ等しく、巴形の透かし孔が認められる。また、同市六供町所在の愛宕山と呼ばれる丘陵上にある甲山一号墳（直径六〇メートルほどの円墳と推定される）出土の埴輪にも近似する。

採集した埴輪が少数であるため、本墓の埴輪の全体像については不明な点もあるが、これまでに知られている埴輪が少ないことから、良好な資料であると思われる。

なお、今回の調査にあたっては、岡崎市教育委員会から多くのご協力、ご教示を賜った。記して感謝申し上げるものである。

註

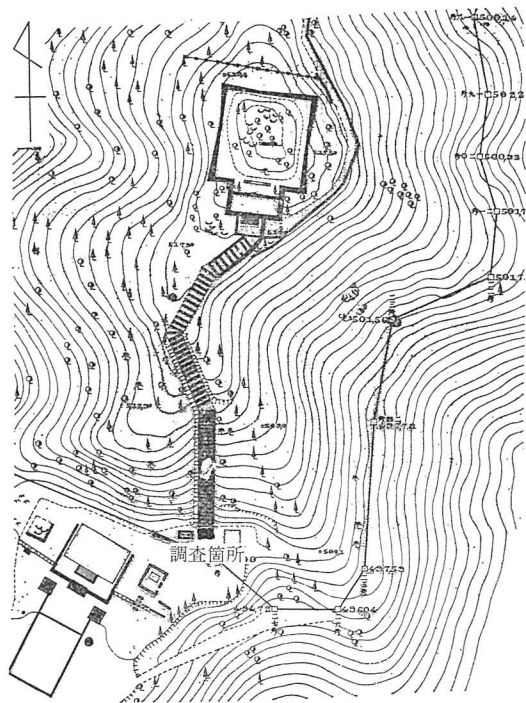
(1)『新編 岡崎市史』史料 考古 下 一九八八

(徳田誠志)

大碓命墓石段改修工事箇所の立会調査

景行天皇皇子大碓命墓は愛知県豊田市猿投町鷲取に位置する。墓は猿投山の山頂近くにあり（標高五二〇メートル前後）、猿投神社西の宮に接して営まれている（第37図）。

この西の宮から墓へ至る階段は六〇段近くを数える急峻なものであり



第37図 大碓命墓の調査箇所(1/1000)

標高差にして二〇メートル近くを登ることになる。この階段が経年のため表面が摩耗し、昇降の際危険を生じることになったことから、改修工事が計画された。この工事に伴って、遺構、遺物の有無を確認するための立会調査を平成九年二月十二日から三日間実施した。墓の墳壁部からはかなり距離があるものの、先述した猿投神社西の宮が隣接し、この神社の境内地にあたることから、神社に関する遺構、遺物の出土も予想された。

調査は階段の最下段にあたる位置に（西の宮社殿が建つ高さ）、二メートル×一メートルの調査トレンチを設け、深さ約一メートルを掘削し

た。掘削の結果は一〇センチ前後の表土（腐植土）の下は、明褐色砂質土が一層のみ検出された。この土層は花崗岩のバイラン土であり（いわゆる山砂層）、地山と判断した。表土層内から燻瓦一点が出土したが、その出土した状況からも近代のものである。

この調査期間中以外の掘削工事については、豊田市教育委員会に立会調査をお願いした。その結果、遺構・遺物は出土せず、よって、工事は予定通り施工した。調査にあたっては豊田市教育委員会に多大なご協力、ご教示を賜った。記して感謝申し上げるものである。

（徳田誠志）

河内坂門原陵樋門改修その他工事箇所の調査

清寧天皇河内坂門原陵は大阪府の河内平野に展開する古市古墳群の南支群を構成する。全長一一二mを測る前方後円墳で、大きく広がった前方部に特色を有する（第38図）。墳丘は濠で囲まれ、前方部の二本の渡土堤により、上池（拝所側の濠）と下池（後円部側の濠）に二分される。

今回、外堤の後円部北東側に位置する樋門を改修することとなり、同じく北渡土堤基部付近の外堤が陥没したこともあって、その復旧工事と併せて、平成九年三月七～九日および十七日に掘削に立ち会った。

一、樋門改修箇所（第38図A）

当該工事のため、外堤内法裾部の二・五メートル×一・一メートルの

範囲を深さ一メートルほど掘削した。調査箇所は既設樋門により全面攪乱されており、床面まで埋戻しの土で、その上部は有機物堆積層であった。遺物は出土していない。

二、陥没復旧箇所（第38図B）

平成八年三月四日に外堤の一部が陥没していることが判明した。該所は北渡土堤との接合部付近で、上池から域外に出水する樋管が外堤下を斜断し、コンクリート止水壁が設けられている箇所である（第39図）。

そのため、樋管の損傷等が疑われ、原因解明とともに、復旧工事を行うこととなった。掘削は約五メートル×三・三メートルの範囲を最深で三・一メートルほど掘り下げた（第40図）。

その結果、大部分は既設樋管の埋戻土であったが、攪乱されていない箇所では築堤するための盛土が厚く観察された。上部で黄褐色、下部で青灰色の土層（Ⅲa）と刃金状に堅く締まった粘質砂質土（Ⅲb）に二分できる。Ⅲa層からは磁器染付、Ⅲb層からは埴輪の小片がそれぞれ一点出土している。埴輪は灰褐色を呈する硬質の製品で、突出度のあまりない突帯部分である。Ⅲb層も土質から近世の粘土刃金との関連性が考えられ、古墳築造時に遡上させることは難しい。また、北壁東端付近でのみ床面近く（標高三八・七メートル）で風化した礫を含む緑灰色粘質土が認められた。地山（Ⅳ）の残丘であろう。昭和五十四年に調査した外堤内法裾の護岸工事に伴う事前調査時（本誌第三二号参照）の地山検出レベルに比べて、高く位置することが注意される。